

伊勢宅

〔むかしの歌人伊勢女此里に住けるよし、諸書に見へたり〕

いせがかつらの家におはして梅の枝にむすびつけさせ給ひける

新拾遺

梅の花香だに残らずちりにけり恨てなどかおしまざりけん

亭子院

御霊社

〔上桂、下桂に同神両社あり。土人生土神とす。例祭は八月十八日、神輿一基づ、あり。祭神上桂社は火雷

神、下桂社は橋逸勢霊なり〕

保古羅明神社

〔久世の南にあり、祭神不詳、土人生土神とす〕

子敦盛旧跡

〔下久世の南、寺戸の北にあり、旧跡今は池とす。伝云、此地に敦盛の室蟄居して男子一人誕生す。

其より源氏の代となり、平家の裔類をたづねさがしければ、忍に絶ずして一乗寺の下松に捨けり。此旧跡に住居する者いにしへより皆怪異ありて遂に住人絶ぬ、故に畠となす。しかれども又五穀実のることなし、その、ち又池となすなり。これに米種を浸すにも曾て芽ことなしといふ。

蓮生寺れんしやうじ 「上久世くぜの西北、下津林しもつばやしにあり。宇津宮蓮生法師うつのみやれんしやうが建立ともいふ。一説くまがへれんしやうに熊谷蓮生くまがへれんしやうが住しといふは非なり」

観音堂くわんおんだう 「同所にあり、西御堂といふ。初メは堂だう宇う巍ぎ々々たり、今は草堂さうだうなり。本尊ほんそん十一面觀音、立像八尺許にして、慈じ

覺大師かくだいしの作なり。元もとは葉室山峯はむろみねのたう堂だうの本尊ほんそんなり。前まへに見みへたり」

大原野おほはらの 「王城わうじやうより凡三里にして、丹波街道たんばかいだう檜原かたきはらの未申一里にあり。大原野おほはらのは惣名にして、中に三ツの村あり、野田のた、

柳川やながは、南条みなみでうといふ」

後撰ごせん 大原おほはらや小しほの山の小松原こまつはらはや木高きたかかれちよの陰かげみん 貫くわん 之これ

続古ぞくこ 小塩山こしほ松風寒まつかぜし大原おほはらのさはの、沼ぬまやさえまさるらん 中なかつ 務む

善恵上人塔ぜんゑしやうにんのたふ 「西山三鈿寺にしやんさんごんじの山下三町さんちやうばかりにあり。碑碣ひけつを建たる。伝ニク云い、上人じやうじん諱しやうは証空しやうくう、姓せいは源氏げんじ、天曆帝てんりやくの皇胤みまろ

にて、賀州がしゆの刺史親季ししちかすねの子こなり。治承元年十一月九日に生なる、此日家このひけに祥瑞しやうずい多おほし。久我内大臣くがみち通親みちちか卿きやう児この聡敏そうびんなるを喜よろこびて養子やしやうとし給たまふ。既に冠礼くわんれいの儀ぎにおよぶ所、童子出塵どうししゆじんのこゝろざしあるによつてこれを辞やす、其嫡子しやくしなるを以もつて父母ふぼ愛情あいじやうしてこれをゆるさず。母公憂いて一条戻橋いちぢやうもどりばしの上うへにて試しに占うらふ、其時僧壹人西にしに過するあつて、真觀しんくわん清淨しやうじやう觀くわん広くわん大智だいぢ

惠観悲観及慈観常願常胆仰の偈を誦するに値ふ。これによつて其法器なる事を思ひ、遂に許し、南都北嶺の官寺を撰ぶ。童子これを聞いてわれ顕名を願はず、貴所は吉水上人にあり、父母礼を篤して吉水に贈る。源空上人の曰、今遁世の門に入るといへども期する所なきにあらず。然るに黒谷の経蔵は已に法蓮房に属し、此吉水の坊も真観房に附したり、汝われに帰すといへども附属の地なし。童子の曰、今師に帰する事出離の爲にして又余の望なし。上人童子の発心其言のあきらかなるを感じて、即日沙弥戒を授け、名を善恵と改名し、剃髮の時金色の観音盆水の中に影現す。建久九年の春源空上人月輪禪定殿下の請によつて、選択集を著す。善恵を偕にして文義を考定す。殿下の曰、師の滅後に至つて此書に不審あらば誰人にか決せん。上人曰、浄土の興旨此書の要義は悉く善恵に附属す、我に異ならず。殿下善恵を崇信し給ふ事初に倍せり。師に親炙する事二十三年、都鄙に於て伽藍を建立する事一十二区、遂に宝治元年十一月廿六日白川遣迎院にて入寂す、年七十一。世に西山上人といふ、浄土宗一派の開祖なり」

西山に住ける頃むしをきゝて

続後撰 草ふかきやどのあるじと諸共にうき世を侘るむしの声哉

慈 鎮

西山に住ける頃雪の降けるに

続千載 つたへこしよ、の跡をも尋みつ竹のそのふの庭のしら雪

慈道法親王

世をのがれて後西山にまかりこもるとて人につかはしける